

〔書評〕

柴田 武著

『方言論』

一

著者柴田武氏が、日本方言学界の重鎮として、「透徹した論理」と方法とをもつて学界を主導してこられたことは、ここに、改めて言及するまでもないことであろう。本書刊行以前にも、『日本の方言』（岩波書店）、「言語地理学の方法」（筑摩書房）、「方言の世界」（平凡社）、「社会言語学の課題」（三省堂）、「語彙論の方法」（同上）などをはじめとする多数の論著を世に送られ、評者なども、つねにその学恩に浴してきた。

本書は、著者の、数多い論文の中から選び出された「方言論文集」である。本書「はしがき」で、著者は、「すでに、一九七八年に『方言の世界——ことばの生まれるところ』という論文集を平凡社から出している。本書は、いろいろな意味で前著に続くものである。」と述べていられる。

本書の構成は、おおよそ次のようになっていいる。

I ことばの地域差

II 方言の分布と変遷

III 方言の記述

IV 方言の発見と説明

V 方言論

VI 方言小事典

著者には、「方言は、ことばの差を地域差としてとらえた場合の言語である」との主張がある。第一章は、このような観点からする、幅の広い地域差論である。第二章は、糸魚川地方での調査を中心とした、言語地理学的研究の成果の一部である。第三章は、NHKの『全国方言資料』に付された、当該諸方言の「特徴」についての、著者の解説を再録したものである。東海・北陸、東北・関東、九州、それに琉球の方言についての記述が見られる。第四章は、「珍しい方言（体系）の発見」にかかわるもので、「ズーズー弁でない東北方言」、語頭に入りわたり鼻音を伴う「高知方言の音声的特徴」など、国語史上注目すべき論文がある。第五章には、「方言区画の方法——「ネットワーク法」の開発」「方言学の将来」など、方言研究の方法と未来とを論じた論文七編が収録されている。第六章は、主要方言項目についての「事典」である。

ここに、一貫しているのは、方言研究の、清新で微細な視点であり、明晰で手堅い手法である。「方言学がサイエンスとして発達する

神 部 宏 泰

こと」を念願する著者の姿勢が、全編の基調として認められる。以下では、本書に接して得た、いくつかの関心事についてとりあげ、時に存念をも述べて、評を進めていくことにしたい。

二

本書を手にする以前から、「方言論」という書名を聞くに及んで、評者は、「方言」を対象にした個別の論ということ以上に、柴田氏年来の、方言学体系の論の展開を期待した。それだけ、印象の強い書名だったのである。が、著者は、この書名に関しては、「はしがき」に、「もし書名にサブタイトルをつけるとすれば、『ひとりひとりの顔が見えることば』である。実は、このことを提案したけれども、今回は、すっきり『方言論』で行こうということになった。」と、淡々と記されているに過ぎない。ここは、「方言論文集」という形態と制約とが、そのまま「方言論」になったと解すべきであろう。

本書の組織は既述のとおりであるが、その内容の多くは、地理学的研究及び史的関連の論文と言えるかと思う。本書のバランスはともかく、ここに、著者の、方言学上の関心の所在を知ることができ。本書の主題からすれば、中核に位置づけられるべき第五章の「方言論」も、おおむね右の大局の流れのなかにあるとみられる。大著出版の相ついで後を受けての本書は、個々の論文に知見の高さと鋭さを見せながらも、「柴田方言学」の全貌を問うのにやや不如意な偏りもあるのは、やむを得ないことと考えられる。

三

著者は、自身の方言研究の姿勢として、本書の「はしがき」に、

次のように述べていられる。

この四十年間、わたしの姿勢は、終始、方言を方言学というサイエンスの対象にして研究することにあつた。直観で事態を把握することはもちろん重要で、それがなければ研究も始まらないが、それを論文の形にして人を納得させるのには透徹した論理を用いるという、サイエンスとしてはごく普通の方法を採つた。

このように、方言を、サイエンスの対象として研究することが、著者の姿勢であり、立場である。ただ、方言研究にサイエンスを求めるのは、多くの研究者に共通した態度であろう。「柴田方言学」が、とりわけこの面で際立つのは、その厳密な論理性にある。

科学としての「方言学」を追究するにあたっては、少なくとも基本的には二つの立場があるように思う。その一つは、方言の存在、方言の差異から出発する立場であり、今一つは、方言の表現、方言の生活から出発する立場である。前者は一般言語学の理論を導入しようとし、後者は方言自体に、まず論理を見い出そうとする。言うまでもなく、前者は外的であり、後者は内的である。「柴田方言学」は、おおむね前者に属するとしてよいのではないか。

著者は、自身の抱懐する「方言学」について、

方言学と言われる研究のなかには、ある方言のひとりの（理想的な）話者を対象にそのことばを記述するようなものも含まれるが、実はこれは方言学への資料ではあつても、方言学そのものではない。地域差という観点が入っていないからである。他の方言との比較対照、共通語との比較対照があつて初めて方言学になるものだと思う。（五六七頁）

と述べていられる。これによつても理解できるように、柴田氏の「方

「言語学」の目指すものは、比較による地域差の究明にある。その地域差が、畢竟、時間的経過に基づくものであることは著者も指摘されるところであり、この点からしても、本書によつてみる限り、「柴田方言学」は、基本として、通時論的な性格を帯びているものと考えられる。言語地理学がその中核を占めるのも、当然のことと言えよう。

右に関連して、「柴田方言学」の実質を理解するうえで注意されるのは、学体系上での、記述的研究の位置である。先の引用文にも、方言の記述は、「方言学への資料ではあつても、方言学そのものではない。」とある。ただし、これより二年前の論文「方言研究の現状——一九八四年」では、今後の研究課題の第一として、「一方言の完全な方言記述」があげてある。前後にゆれがあると言へばそのとおりであるが、これも、記述的研究の、ある不透明さと、著者の考えの時間的推移の結果とみるべきであらうか。

ところで、著者の示される構造記述は、「人間を捨象」した、徹底した分析を伴うものである。「方言学が抽象化の程度から見て低いところにとどまっているとしたら、学として高い段階にあるとは言えないと思う」（五七四頁）ともあるように、学としての要求はきびしいものがある。ただ、実証科学としての方言学にあつて、人間性を排除し、均育のとれた体系を得ることのみが、学の質を高めるとするのには、一方向的で理に偏りすぎるとも言えるのではなからうか（この点、著者の内省もあるへ七三頁）。人間性に立脚した、一般的には非合理ともされる面に、かえつて方言の真実も蔽われている。記述的研究においても、この点に配慮する立場があつてよい。

方言学が、地域性を基盤に成り立つものであることは、何人も異

論のないところであらう。研究上、地域性——地域差の観点は重要である。もとよりその観点は、外面のみでなく、内面世界の究明にも深くかかわっている。このことは、構造記述にあたつて、「その方言の内在する論理で行われなくてはならない。」（五七四頁）とする著者の指摘にも現れていると思うが、その内在論理こそ、地域差を支える地域性に立脚するものに外なるまい。しかしながら、高度の抽象化を旨とした構造記述では、その地域性を切り捨ててしまう結果にもなりかねないであらう。そこにはもはや、人間的要素は、影を留めがなくなつていくはずだからである。

四

ここまできて、いささか気になるのは、著者の「方言」の概念についてである。著者の定義によれば、「地域と地域を比べたときに出てくることばの違いを方言という。」（五九三頁）ということになる。当然ながらこの定義は、地域差の究明を目指す、著者の「方言学」の目的と照応している。

「方言」が、特定の地域・地方のことばであることは、大方の認めるところと思うが、地域差に基づくことばの違い——となると、対象が「語」を中心とした個別のものに限定されがちであらう。しかも、固有性・特殊性が前面に出ることにもなつて、いつそう局限されてくると思われる。事実、著者の「方言」は、「語」及びその次元の特徴を指すことが一般と見受けられる。例えば「カタグルマの方言分布」「七四種の方言」などという言い方があるが、これにも、著者の見解が、如実に現れているように思う。このような方言観は、著者の「方言学」の中核が、言語地理学によつて占められているこ

ともかかわつていようか。

地域・地方のことばとしての「方言」については、その地域・地方のことばの総体・体系を指して言うことがある。評者などは、むしろこの概念を正統なものと心得てきた。この立場からするならば、方言の記述的研究・体系的研究は、「方言学」の重要な分野となるはずである。本書においても、例えば第三章の「方言の記述」に用いられている「方言」は、言語体系としての方言を指したものと解される場合がある。すなわち、「東部方言」「西部方言」などの伝統的な用い方がそれであり、「富士川方言」「浜名湖方言」などの題下での記述の場合などがそれである。関連して言えば、「統一ある方言地域」という説明も見られる。

「方言」を「語」について言うのも一つの立場であるに違いないが、それにしても、定義と研究展開にあつては、立場や視点を統一する配慮が欲しかったように思う。

五

著者の「方法」が、「透徹した論理」によつて貫かれていることは、前項でもすでに言及した。その鋭さについては、「ドライなやり方として、抵抗を感じさせることがあつたらしい」（はしがき）と、著者自身も自覚しておられるとおりである。その意味でも、「柴田方言学」は、「方法の（際立つ）学問」と言うこともできると思う。

「方法」について、著者は次のように述べていられる。

「方法」は、材料の集め方とか、整理の手順とか、分析の手法とといった技術的なことを言うのではない。もちろん、そのことと関連があるが、むしろそれは派生的、瑣末なことである。「方法」と

は、研究についての「考え方」である。何を研究するのか、どういう考えで研究するのかということが「方法」なのである。（五二八頁）

この「方法」の論には間然するところがない。ただ、ここで関心を呼ぶのは、著者の「研究についての考え方」である。と言うのは、技術的なこととされた分析の手法その他に、とりわけ厳密な処理が見られ、むしろこれが、「方法の学問」の、顕著な特徴ともなつていると解される面があるからである。このような具体的な方法を、根底にあつて支える「考え方」とは何か。それこそ、既述もした、サイエンスの立場——換言すれば、方言の地域差を、サイエンスの對象として究明する——ということに外なるまい。が、これが方言の本質にかかわる「考え方」かどうかは、検討の余地があるように思う。

著者の分析の手法が冴えを見せるのは、主として「語」またはそれに類する特定言語単位を対象にすることである。「語」の地域差を「方言」と考える著者の立場からすれば、分析が、「語」及びそれに類する単位を対象に、しかもその細部にわたるのは、当然と言えるかと思う。ただ、ここで懸念されるのは、強度の分析による、人間性要素の喪失の問題で、この点については、前項でも指摘したとおりである。

著者は、「これからは、「方法」をもつて現象を見る時代である。

「方法」を持てば現象が見えてくる。」（五二八頁）と言われる。確かにそのとおりであろう。もつとも、その具体の「方法」が、現象を把握するのに適しているかどうかは、別に問われなければならない。微細・堅固な「方法」が一人歩きし、その「方法」の枠の中でしか

現象を見ない、というようなことになるのを恐れるからである。現象を説明するための「方法」であるならば、「方法」が現象によって規制されることも、当然起こり得るはずで、こうであるとすればなおさらのこと、柔軟な「方法」をもって現象に臨むことも、重要な態度であると思われる。

これに関連して言えば、談話資料の収録に関して、次のように述べていられるところがある。

談話場面はあらかじめコントロールしておく必要がある。たまたま出会った談話場面で録音したような資料もそれなりに有益であるが、談話の節々について説明を加えることになると、一般にこういう資料は弱い。場面を人為的に設定して、いわゆる「やらせ」をやるうというのである。(五七二頁)

このような実験的方法是、それとして、確かに一定の効果を表す。特に、限定的な比較資料としては有益であろう。それにしても、「やらせ」というのは気にかかる。評者などは、このような資料を得るにしても、やはり後めたさを覚えてきた。これが、「方法」をもって現象を見る——という、正当的なものとして評価されるのであれば、いささか抵抗を感じないではいられない。何と言つても、第一級の資料は、自然のままの対話に如くはないからである。「やらせ」は、やはり補助資料に過ぎないのではなからうか。

ちなみに、第四章は「方言の発見と説明」である。この「方言の発見」という言い方にも、評者は、終始抵抗を覚えてきた。言うまでもなく、本章での諸論は、いづれも国語史上重要な「発見」で、著者の学識に、評者も敬意と感嘆を禁じ得ない。が、ここには、どうにも例の「アメリカ大陸の発見」がダブってしかたがない。つま

り住民不在なのである。高度のサイエンスを目指す、在外的な著者の立場からすれば、当然のこととされようが、これも「方法」優位の姿勢と、深くかかわっていることを思わないわけにはいかないのである。

六

著者は、言語地理学について、人間復活の学問であると説明される。

言語地理学は、構造分析で失われた人間を復活させようとする。(中略) 構造言語学は人間を捨象することに成功したとも言える。しかし、それは人間を失ったことでもある。それを「現代の」言語地理学が復活させようとするのである。人間を復活させるといふのは、話者の立場から言語を見直すということである。(七三頁) このとおりであるならば、著者の「方言学」は、人間尊重の学問ということになる。著者の言われる、「話者の立場から言語を見直す」とは、どういふことなのか。構造言語学的手法の第一人者と目された著者の発言だけに、確かに注目に値する。

著者は言語地理学で取扱う単位について、「言語使用者にとつての具体的単位と考えられる「語」を単位に取りあげる」としていられる。ここに、著者の、人間復活の原点があるのであろう。しかし、「語」を具体的単位と考えるのは、いくらか無理があるのではなからうか。言語地理学で扱う「語」が、個人によつてもたらされる情報であるとしても、その「語」は、あくまでも当該集落社会の言語習慣(ラング)であつて、当の個人の発想による具体的な表現行為ではない。言語地理学が個人に求めるものは、個人が体得している言語

習慣の提示である。ここに説明を求めることがあつても、その説明も、おのずからに住民の多数を代弁すると推定されるものでないという意味が薄い。個人の属性や体験によつて、情報に差があるとしても、それは、条件差に基づいて存在する特定社会習慣の反映に過ぎない。その多様性の多くは、言語内と言うよりも、言語外の事実に基づいていると考えることができよう。

さて、例えば「民衆語源」であるが、著者が、これによつて、「語」の変遷を推定される手順は鮮やかである。「民衆語源」が話者——というより代々の住民の命名心理に、影響力を持ってきた事実は認められる。その面からすると、「民衆語源」に注目することは、話者の立場に立つことになるのであろう。しかし、「民衆語源」は、やはり言語外のものではなからうか。著者も、言語地理学について、「言語について、(中略)非言語によつて説明する方法を持つ学」(七三頁)とされるとおり、「民衆語源」も、畢竟、「語」の変化を推定する手段に外ならない。

なお、先に引用した一文に、「言語地理学は、構造分析で失われた人間を復活させようとする。」とある。構造言語学で失つた人間を、言語地理学で復活させるといふのは、いささか筋違いの感がないでもない。もとより人間の復活は歓迎すべきことに違いないが、同時に構造論分野での新しい展開の中でも、人間性への関心を深めることが重要であるように思われる。柔軟な構造観に立てば、このことは決して不可能ではないはずである。

七

第五章は「朝日小事典・現代日本語」からの、関係部分の収録で

ある。事典となると、どうしても形式や内容、それに、分量にも一定の制約があつて、なかに気がかりな部分が出てくるのは、やむを得ないことと思われる。ここで、評者にも関心のある項目をとりあげ、いくらかの疑問を述べてみたい。

「可能表現」(六二〇頁)で、九州の「能力可能」と「状況可能」の形式について、「福岡・佐賀両県では、『書クル』(『書キユーツ』)、『書キクル』と『書カルル』との区別である。前二者が能力可能、後者が状況可能である。」とある。「書クル」は可能動詞(下二段)と思われるが、括弧書きで「書キユーツ」とあるのはどういう意味か。あるいは「書クル」がその縮約形と判断されたためであらうか。「書キユーツ」は「書き得る」であらう。佐賀・長崎、それに熊本の西・南部など、九州西辺に分布する形式であるが、福岡にはほとんど見られない。「書クル」(『書キユーツ』)はやつてみたらうえて可能かどうかわかる場合、「書キクル」はやつてみるまでもなく可能かどうかわかる場合である。」とあるのも、説明がよくわからない。両形式では「ユル」の方が古形式・衰退形式であつて、新形式の「キル」に押されて意味機能が局限され、いちだんと主情性の勝つたものになつている。つまり、「ユル」に「能力可能」の主座を譲つて、精神的・主情的な条件に支配されがちの、「主観状況可能」とでも言えるものへ推移しつたのである。

「熊本・鹿児島には、このほかに『書キガナル』という状況可能の言い方がある。」とあるが、「ユガナル」はむしろ「能力可能」として地歩を固めたもので、それが、しだいに「状況可能」の分野をも占めるようになったものである。つまり、単一形式で両分野を表しているのである。「熊本・鹿児島」とあるが、熊本県はその南

部、鹿児島との接境地帯に分布するに過ぎない。むしろ宮崎県南部に、広い分布の認められるのが注意を引く。

「長崎県では、このほかに『書キダス』がある。余裕・ひまがあつて書くことを始め得るといふ一種の能力可能である。」とあるのも気になる点である。この形式は、外的状況を突破排除する機会を得るか否かに焦点を置くもので、余裕をもつての着手——ではない。むしろ直接には、「能力」「状況」にかかわるものでもないと言えるのである。しいて言えば「機会可能」とも言うべきものであろうか。「書キダシタ」は「やつと書く機会を得た」ということになる。なおこの言い方は、長崎県のみでなく、九州のほぼ全域にある。九州の可能表現法は、史的推移の跡が生なましく、諸形式も多様で複雑である。それだけに、単なる外的アプローチで表現法の真相に迫ることは、容易ではないのである。

八

以上、「方言論」を読んで、所感の一端を述べた。六九五頁に及ぶ大著の、ほんの一部にしか触れていない思いが残る。著者の念願される方言学のサイエンスとは何か。著者の示された理論と実践の重みの中で、このことをしきりに思う昨今であった。著者の意を十分に体せず、非礼に及ぶこともあつたかと恐れる。ご寛恕を乞うしだいである。

（昭和六十三年七月十四日発行 平凡社刊 A5判 六九八頁
定価五六六五円）

——兵庫教育大学教授——

（平成元年十一月十五日 受理）